

出かけてみました



中国寧夏で リンゴ栽培を指導

佐久間忠雄（福島県）

指導する筆者（左端）

今年5月、機会あって国際善隣協会派遣の専門家として、中国寧夏回族自治区青銅峽市を中心にリングゴ合作社（組合）を視察し、技術指導を行ってきた。

先方からのお話では、「金冠」という品種の老木の更新と進ん

だ栽培技術の指導を希望される、とのことだった。「金冠」とは「黄元帥」ともいい、原産は米国西ババージニアということだ。「ゴールデン・デリシャス」だと分かった。最近、日本ではあまり栽培されていないが、世界的には「ふじ」に次いで広く普及している品種である。これで寧夏行きが少し身近になったように感じた。

出張期間は5月12日から5日間。これでどれだけの手配が散り、最初の袋掛の大事な時期でもある。省都の銀川市のホテルに泊ま

て、この地方の4か所のリンゴ農園を駆け巡り、袋掛けの実技

を示し、講義をした。皆、熱心に聞いてくれた。特に関心を示したのは日本から持参した、花が落ちたあとに掛ける袋であった。日本人らしいきめ細かい仕掛けの底に施した蜜を貯めない仕掛けに関心が集まった。持参した500枚の袋は各リンゴ園でまたたくうちに奪い合うように散って行った。

市場で「富士」と「国光」が売られていたので、買って試食してみた。形も小ぶりで、味も日本のもとは違うが、これはこれで良いのだろう。1955年ごろまでの日本のリンゴを思い出させる形と味であった。

今回視察してみて、現地では余り問題にされていないのだが、この地方のリンゴ園ではリンゴの樹形を改善することが最大の問題であった。樹が大きすぎるのである。

老木は背丈が高くなり過ぎると、摘果、袋掛け、収穫といった作業に大きな労力を要し、作業管理を困難にする。次が主幹から発生している側

枝の整理である。現在は側枝が無秩序に配置され、枝がこみ合い、太陽光を遮断している。果実が実を結ぶ枝の配置を改善して、光合成の効率化、合理化を図ることが必要だ。

ただこれらは急いでやってもならない。樹の成長を考慮し、数年をかけて形をととのえる。急ぐと、切り口が多くなり、枝の傷口から病原菌が入り、腐乱病に罹る心配がある。

中国のリンゴ生産量は3・598万トン（2011年）、実に日本の55倍であり、世界の47%を占める。品種は「富士」「紅富士」などのふじ系である。

一方、北京近郊辺りでは数年前から、リンゴ園がサクランボ園に変わりつつあるともいわれている。これも豊さを増している時代の流れだろうか？

しかし、全体的には今回訪れた寧夏をはじめ西北地域にはリンゴ栽培が拡大する余地も大きく、しばらく中国のリンゴは増産が続くものとみられる。